

「長崎諏訪神社祭礼図屏風」に描かれた祭礼と都市長崎

赤瀬 浩

一 はじめに

「長崎諏訪神社祭礼図屏風」(以降は本屏風と省略する)は、長崎市が平成二九年度購入した資料である。作者、作成年代等不明な点が多いものの、江戸時代の長崎を描いた貴重な資料である。

各隻一扇あたり縦百六六センチメートル、横六一センチメートルの六曲一双。銀泥彩色画。経年の損傷を修復した部分があり、さらに近年新たに表装されたためか、絵の一部剥落や欠損も認められる。²

本屏風のモチーフは、長崎の町と長崎の祭礼「くんち」の行列。右隻左隻とも、長崎の主な建物や施設、特徴的な景観が描かれている。右隻には、諏訪神社から興善町辺りまでが描かれ、左隻には、興善町から出島、大波止までが描かれている。

サイズの関係上、それらの景観は、縮小されたり省略されたりして、寸分たがわずとはいかないが、特徴をとらえ、構図に収まるように描かれている。³

くんちのようすについては、行列や奉納踊、奉納場所など、順序等しきりに従って描かれている。

本稿では、屏風に描かれた祭礼の様子と都市長崎の景観について「絵解き」の手法によって確かめていくことにより、本屏風の特徴を明らかにすることを目標に置きたい。

なお、諏訪神社祭礼に関して「長崎くんち」「くんち」「奉納踊り」「奉納踊」などさまざまな用語が文献等で使用されているが、本稿では、用語の定義を意図することなく、便宜上「くんち」「奉納踊」

等の表記を使用する。

二 「長崎諏訪神社祭礼図屏風」の位置づけ

本屏風についての伝来は不明だが、名称の示す通り、長崎諏訪神社の祭礼を描いたものとして扱われてきたようである。右隻から左隻に展開する場面の移り変わりが、くんちの行列を中心に描かれていることから、この認識は屏風を見る者に共有されてきたのである。

くんちを描いた絵画資料については、本屏風以外にも複数確認されている。⁵ それら資料を整理することで、本屏風の占める座標を確かめたい。

くんちにかかる絵画資料については、久留島浩氏が「『崎陽諏訪明神祭祀図』の魅力」で詳しく言及している。本稿ではまず、久留島氏の論考に依拠しながら、くんちを描いた絵画資料について整理することとする。

久留島氏によると、くんちの祭礼を描いた資料は多いものの、祭礼行列全体を詳しく描いたものは少ない。神幸行列と付祭りの両方を描いたものは「崎陽諏訪明神祭祀図」(大阪府立中之島図書館蔵、以下「祭祀図」と「諏訪神社神事祭礼絵巻」(長崎歴史文化博物館蔵、以下「祭礼絵巻」)しかない。

「寛文長崎図屏風」(長崎歴史文化博物館蔵、以下「寛文屏風」)⁷は左隻にお上りの行列が描かれている最古の資料だが、正確さに欠ける。

「諏訪大祭神輿渡御絵巻」(長崎歴史文化博物館蔵、以下「長崎名勝図絵」)には三社の渡御行列が詳細に描かれているが、付祭りにあたる部分がすべて描かれているわけではない。

富貴楼所蔵「諏訪神社祭礼図屏風」や「諏訪神事御供道行之図」(長崎歴史文化博物館蔵、以下「道行之図」)、「長崎諏訪神社祭礼図屏風」(国立民俗博物館蔵、以下「民博屏風」)では、付祭りの行列、御旅所での奉納踊、お上り後の神事の一部が描かれているが祭礼行列全体ではない。

「祭祀図」と「祭礼絵巻」は、神幸行列と付祭り両方が詳細に描かれた稀有のものである。その違いは前者がお上り、後者がお下りくだりを描いていること、場所が御旅所・西役所と諏訪神社一の鳥居前であるところ。以上が久留島氏の指摘である。

神幸行列というのは、神輿の行列。五本の大鉦を行列の先頭に太鼓、獅子頭、法性兜、御神鏡等に続き、諏訪、住吉、森崎三社の神輿。さらに大官司以下の神官、惣町乙名等の地役人、最後に長崎奉行の御名代、番方の役人等が神輿の供奉として市中の決まった経路を歩く神輿行列である。

くんちの神幸行列には、前日のお下り、後日のお上りがあり、その行列に先行して、各踊町が練り歩き、これを合わせて神幸行列ととらえることができる。

一方、付祭りは、神幸行列を終えた各踊町が、定められた場所ところで奉納踊を行うこと。また、庭先回りと称して町内や近隣の町を回って踊りを披露することである。

神幸行列と付祭りは連続した一連の行事であるが、屏風や巻物にすべて描くには、ボリユームがあるためか、久留島氏が論じたように、両方を詳細に描いた絵画資料は希少である。

では、本屏風は、神幸行列と付祭りという視点からみるとどのようにとらえることができるだろうか。

本屏風の右隻六扇すべてにわたって神輿の渡御が描かれている。

中心の三、四扇には三社の神輿と供奉する社人、地役人、大官司が描かれ、一、二扇では神器など先払いの行列が先行し、五、六扇には馬上の御名代と警護の役人が続いている。

状況は、勝山町の長崎代官所前で行列を組みなおし、まさに神輿が動き出そうとする瞬間を切り取っている。このように右隻全体が神幸行列を描いていることに間違いはない。

次に左隻をみると、右隻から連続した行列が描かれていることがわかる。行列の先頭は三扇の中央。六扇には最後の踊町が歩いている。この行列は、神輿行列の先払いとして神幸行列を構成している。

二扇は、西役所前の棧敷で薩摩踊りが披露されている。さらに一扇では、御旅所で唐子獅子踊が披露されている。神輿行列の先には、踊りの披露という付祭りが、一連として描かれているのである。

このことから、本屏風は祭祀図、祭礼絵巻と同じく、神幸行列と付祭り両方が描かれたくんちの絵画資料であるとみることができる。

三 「長崎諏訪神社祭礼図屏風」の作成年代

作者製作年等が明確に記されていないが、本屏風には、その手掛かりになる描写がある。このうち三点について確かめていく。

① 「寛政二」の文字

西役所前の棧敷、薩摩踊りの指物に「寛政二」の文字がみえる。指物には「一万度大祓 御師橋村肥前大夫」と書かれた大福帳の模型。その下に「御扇子」と書かれた箱の模型。その後ろに藁束を逆さにした造作があり、さらにその後ろに「寛政二」と書かれた模型がある。指物のテーマは伊勢御師であろう(図1)。

町の印となる傘鉦が確認できないので、踊町の特定はできない



図1 薩摩踊りの指物「寛政二」

いた絵画資料の中に、実際の踊町ではなくとも、大薩摩が描かれることが定番になっており、本資料でも屏風の中心に勝山町の大薩摩を配したものと考える。

祭祀図、祭礼絵巻、道行之図に描かれた大薩摩一二個の指物は、唯一先頭を歩く樽の上に鯛をあしらった指物だけが共通しており、目新しい話題性のあるものを毎回製作し、披露していたものと思われる(図2)。したがって、大薩摩を描く画者にとって、薩摩踊りの約束は一二個の指物、樽の上の鯛が先頭という定石を守れば、創作の余地があるものと考えられはしないだろうか。

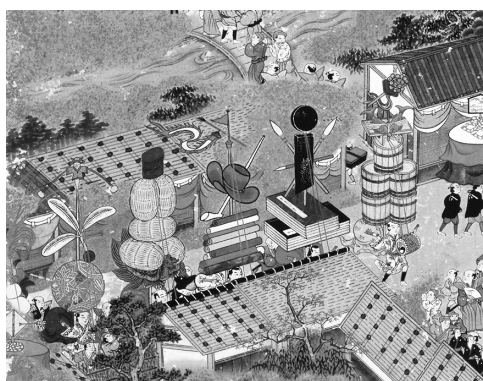


図2 諏訪神社御供道行之図(部分)

が、樽を重ねた上に二匹の鯛をあしらった指物が、他の資料で勝山町の指物と紹介されているので、勝山町と考える。

くんちを描

大夫は、長崎と師檀関係を結んでいた伊勢御師で、御祓大麻の配札を独占していたほか、長崎町人の伊勢参詣の世話、伊勢講の組織づくりなど、住民と深くかかわっていた。さらに、寛政元年(一七八九)内外宮の式年遷宮が行われたことも伊勢御師が注目をあびる背景であったろう¹⁰。

この指物が実在したか否かを証明する他の資料は見いだせないが、わざわざ「寛政二」の文字を記したのも式年遷宮が長崎でも話題となり、伊勢参詣の流行が起こっていたことをあらわしていると考えられる。

なお、バランスを考えれば、指物の真上にあるべき重心が「寛政二」の祝詞によって後ろになり、これではまともに歩けなくなる。「寛政二」の祝詞は、指物の一部ではなく、製作年代を残すため背面にさりげなく描かれた画者の創作である可能性もあげておきたい。

② 諏訪神社の描写

本屏風では、建造物の短縮や省略が見られることは先に述べた。しかし、例外として諏訪神社の社殿や境内に限っては細密に描かれている。別に素描した下絵を生かしたものは分らないが、諏訪神社の社伝と合わせて読むと以下のような年代が提案できる。

・ 本殿の玉垣

本屏風に描かれた諏訪神社最上部にある本殿の瑞垣あるいは玉垣は、本殿の後方と側面に設置され前面は開放されている。(図3)

『長崎市史』地誌編に「寛政四年 本殿の前面に玉垣石製を新設した。中尾金左衛門なる者の奉納するところである」とある¹¹。また、『鎮西大社明鑑』に、「石玉垣 周囲三三間 願主東築町中尾金左衛門吉恒」とある¹²。



図3 本殿玉垣（本屏風部分）

寛政四年（一七九二）奉納された玉垣が、本屏風に見られないということは、描き漏らしではなく、寛政二年には前面の玉垣がなかったからと考えられる。したがって、本屏風の製作年代の下限は寛政四年という提案が可能である。

・長坂の石牆と踊馬場老松
本屏風、諏訪神社大門と踊馬場を結ぶ七三段の長坂は、左右

練塀を配して描かれている。長坂は、享保七年（一七二二）町年寄高木作右衛門忠栄が花崗石常夜灯一对を寄進し、七三段に改修した¹³。長坂左右の練塀はこの時築かれたとみるべきだが、寛政一二年、長崎奉行肥田豊後守頼常が石牆を寄進してからは、諏訪神社長坂には石牆が描かれるようになった¹⁴。石牆は、屋根も壁も石造りのため、白色や灰色一色で描かれている。

長坂に注目して、各資料を検討すると次のようになる。

寛文屏風の長坂には塀がなく、七三段に整備される以前の姿のようである。

祭祀図に描かれている長坂は、壁も屋根も白色で描かれており、他の場所に描かれている練塀とは明らかに違うため、石牆と考えた¹⁵。

祭礼絵巻に描かれている長坂には高木作右衛門寄進の石灯笼一对と白色に描かれた塀が認められる。これも石牆であろう。

民博屏風の長坂は、屋根が瓦葺き、塀が石塀で描かれている。石牆ではなく、練塀を描いたものと考えたい。

本屏風、諏訪神社長坂の描写では、瓦屋根と白壁の練塀が描かれ、一对の石灯笼は描かれていない。（図4）また、踊馬場の右側に社殿回りまで成長した二本の大松がみえる。この大松は踊馬場の名物であったが、寛政一一年（一七九九）西山郷の火災で類焼したと記録されている松と考えられる¹⁵。

したがって、踊馬場の老松の描写と長坂の石牆によれば、本屏風の作成年代は、寛政一一年あるいは寛政一二年（一八〇〇）を下限と考えることができる。

③ 住吉社の神輿

㊦ 諏訪神社三座の神輿は、寛永一一年（一六三四）渡御行列開始のために新調された。渡御の日までに一座が間に合わなかったため、諏訪、住吉二座のみで初めての渡御を行った。この例が守られ、森崎の渡御は宝永二年（一七〇五）まで行われなかった¹⁶。

① 延宝四年（一六七六）諏訪、住吉二社の神輿が新調された。京都の工匠蒔絵屋喜左衛門調製で、一社分銀七貫目を費やした。それまで使用した神輿は、松尾神社、茂木八武者権現に下げ渡された¹⁷。さらに、㊧ 宝永四年（一七〇七）には渡御に合わせて森崎一社分



図4 大門と長坂の石牆、大松

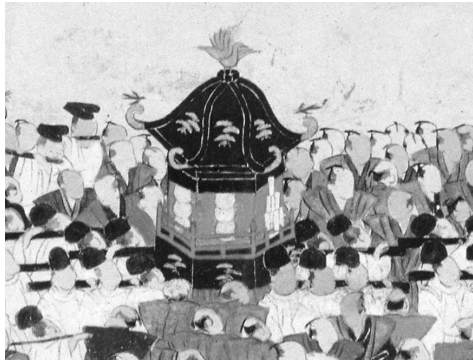


図6 住吉社の神輿（祭礼絵巻）



図5 住吉社の神輿（本屏風）

が追加で新調された。『長崎市史』地誌編によれば、京都吉田家工匠上田左兵衛が調製し、同年船で運ばれてきたものである¹⁸。

続いて市史では、明和七年（一七七〇）「神輿を修理す」とあり、寛政八年（一七九六）奉行、地役人、惣町の寄付銀六〇貫目を募り、三座神輿及び諸種の神器を修理したとある。同じく文政六年（一八二三）費用千両をもって、神輿諸神器の総修繕を行っている。

時代は下り、⑤明治十一年（一八七八）京都藤野雲平、尾張大場新兵衛の二人を長崎に招き三座神輿及び諸種の神器を新調した。現在は、この神輿を使用している。それまでの神輿三体は柳川三島神社へ譲渡された。

『長崎市史』によれば、⑦、①と④、⑤の三代の神輿が存在したことになる。⑧は、製作場所は不明だが、他の例によれば



図7 住吉社神輿

る旧諏訪神社の神輿は、住吉神一体のみで、諏訪、森崎両神二体はすでに現存しておらず、鏡や装飾品の一部が残っている。

住吉の神輿は、装飾の欠落、塗装の剥落などはあるものの原型は保たれ、内部に修繕の履歴が記録されている。

寛政八丙辰歳再興

乙名頭取

石本幸四郎興長

諏訪社取締方掛

金子徳次右衛門祐栄

文政六癸未年再興

乙名頭取

野口承作本壽

徳岡元三郎恵幸

中村作五郎得一

諏訪社取締方掛

金子恵吉郎祐知

京都でつくられたと考えた¹⁹。

三島神社に譲渡された①④の神輿が、確認できたので、絵画資料と三島神社神輿を比較し、それぞれの作成年代特定の材料としてみた²⁰。

三島神社に保管されてい

同 手附

駒井利右衛門忠善

吉田宗平以貞

犬塚弾治忠行

金具師

江戸神田住

金子重兵衛

道山民蔵

紋太郎

熊助

(図8参照)

現存している住吉社の神輿①は、延宝四年新調され、明和七年、寛政八年、文政六年に修理されている。明治十一年三島神社へ譲渡されたということである。(図7・8)

寛文屏風、民博屏風には神輿が描

かれておらず、比較はできない。祭祀図に描かれた神輿は人物に比べ巨大に描かれ、実際には担げないような形状だが、台輪と屋根に描かれた三階松の飾り、赤い囲垣と前面背面に配された鳥居など装飾品を比較すると三島神社神輿と特徴が一致する。細かく見れば台輪隅金物などが絵図には描かれていないが、文政年間の修理の際に部分的な改造がなされた結果と考えられる。大きな特徴として、神輿全体が六角形で、正面と背面に一辺、左右に角を配した構造で、前後の鳥居も角ではなく、辺に面している。以上のことから祭祀図に登場する神輿は三島神社神輿と同じものと考えたい。²¹⁾



図8 住吉社神輿床に記された銘文

祭祀絵巻に描かれた神輿と祭祀図に描かれたものは、台輪の隅金物がないところも含め、形状や装飾を比べると同一。(図6)したがって、三島神社の神輿と同じものであろう。

一方、本屏風に描かれている住吉神の神輿と祭祀絵巻、祭祀図のものと比較すると大きく二点が異なる。(図5)まず、台輪の装飾が三階松の飾りではなく、本屏風では小さい円形の銚のようなものを連ねたものである。また、神輿の正面に六角形の辺があるのに対し、本屏風では六角形の角がある。同様に本屏風と三島神社のものと比較すると二点の違いは明らかである。

したがって、本屏風は寛政八年修復以前の形をし、祭祀絵巻、祭祀図は寛政八年以降の神輿を描いたものと考えられる。寛政八年の修理で、神輿正面を三〇度ずらして平面とし、台輪に三階松の飾りを施し、文政六年の修理では、傷の付きやすい台輪の角を金物で補強したのではないか。

以上のように神輿の形状を基準にすれば、祭祀絵巻と祭祀図が描かれたのは寛政八年以降、本屏風が描かれたのは寛政八年以前。このことから本屏風製作の下限が寛政八年と年次比定できる。

四 屏風が描いているもの

①登場人物の分布

本屏風の構図が、お下りの祭礼行列を描いていることは先述した。右隻から左隻にむかって進むルートが屏風の中心を貫いて連続している。ここであらためて、両隻の描写がそれぞれどのような性質のものなのか描かれた人物の分布を通して、両隻の違いを確かめる。

欠落した部分に描かれている人物、判別できない人物や数え漏れをおそれずにあげれば、屏風一双全体の登場人物は、一、〇〇三人。

| 登場人物 | 右隻 | 左隻 | 計 |
|---------|-----|-----|------|
| 奉行所役人 | 69 | 10 | 79 |
| 地 役 人 | 125 | 0 | 125 |
| 神 輿 守 | 36 | 0 | 36 |
| 行列社人 | 171 | 0 | 171 |
| 神 官 | 13 | 0 | 13 |
| 町 人 | 50 | 350 | 400 |
| 踊 町 | 0 | 156 | 156 |
| 阿 蘭 陀 人 | 0 | 5 | 5 |
| 黒 坊 | 0 | 4 | 4 |
| 唐 人 | 0 | 10 | 10 |
| 旅人・飛脚 | 0 | 4 | 4 |
| 計 (人) | 464 | 539 | 1003 |

表1 屏風中の登場人物と人数

一七一人、神官一三人の四一四人が行列を構成する人物である。一方、それ以外の町人は総数で五〇人。その内行列を見物している人物は二一人と少ない。

行列とは関係ない場所を確認できる町人二九人は、祭礼そのものと関わりのないたまたまである。つまり、右隻にはほとんど見物人のいない神輿行列が描かれているのである。開け放たれた沿道の家にも人影がみられない。

一方、左隻では奉行所の上級役人が一〇人。踊町の参加者一五六人、オランダ人五人、召使四人、唐人一〇人、町人三五〇人、旅人三人、飛脚一人。町人のうち祭礼に関わらない場所に二〇名ほどの人物がいるのを除けば、残りはすべて見物している観衆である。踊町も含めれば、屏風に登場する人物のほとんどは、祭礼に参加していることになる。(表1)

以上のような人物分布を通していえることは、右隻は見物人のいない神輿行列。左隻は見物人多数の奉納踊の場面ということである。

右隻に四六四人。左隻に五三九人の人物が描かれている。右隻では次の通りの人物分布が確認できる。奉行所役人六九人、地役人一二五人、神輿守三六人、社人

久留島氏の指摘した神幸行列と付祭りの視点でいえば、右隻は神幸行列、左隻は付祭りと明確に区分され描写されているといえるだろう。

前掲「『崎陽諏訪明神祭祀図』の魅力」で、祭祀図に登場する人物の分析が紹介されている。「正確には四千七十三人。内訳は、出演者が二千七百八十一人、屋内の見物人が七百七十人、屋外の見物人が五百二十二人である。」

祭祀図に描かれた人数と比較すると本屏風は四分の一程度に抑えられている。実際の祭礼では祭祀図に近い人数が関わっていたと考えられ、本屏風では人物の大幅な省略がなされているのである。画面のポリウムの違いはあっても屋内の人物や沿道の観衆など、描けるスペースがあるにもかかわらず無人のままということに本屏風の性質の一つが表れている。

②右隻の検討

・諏訪エリア

右隻の中央を左右に横切るように描かれているのは、神輿行列の道筋。主題が渡御行列であることは、この構図から明らかであるが、渡御の道筋を利用して画面を三つに区切っていると考える。

渡御の道筋である馬町通り、勝山町から立山役所への通りで区分された画面右上の範囲を仮に諏訪エリアと呼びたい。諏訪エリアの中心は諏訪神社である。(図9)

諏訪神社は寛永三年(一六二六)青木賢清が円山(現松森神社)に、諏訪、森崎、住吉三神を合祀して開創し、当時長崎で盛んだったキリシタンに対抗する拠点として長崎奉行の手厚い保護を受けた。くちの祭礼もキリシタン対策の一環として始められた。

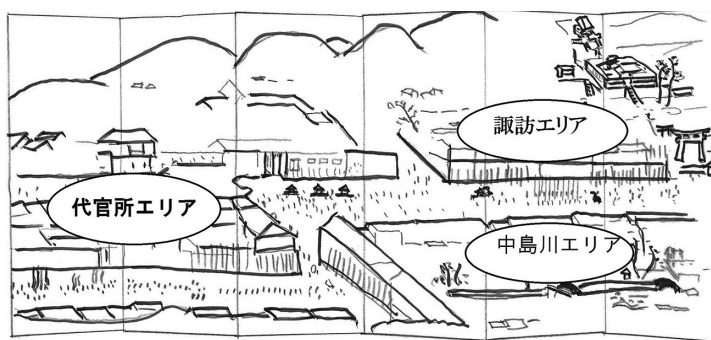


図9 右隻各エリア

慶安元年（一六四八）玉園山の現在地に移り、その後一万七千坪を朱印地と認められた。²³

画面右上に、本殿、拜殿、中門、能馬場、大門、長坂、踊馬場を経て一の鳥居まで右斜めに下るように描かれている。「神社明細調帳」²⁴の附図などでは、正面から描かれているため奥行きが分らないが、本屏風の諏訪神社は風頭山中腹からみた立体的な描かれ方している。

本殿は木造柿皮葺の流造。木製とみられる瑞垣が背面から側面を取り巻き、正面は開放されている。（図3）このことは本屏風の製作年代特定の根拠として既に述べたが、本殿の造りも絵画資料によって違いがみられる。

祭祀図に描かれている本殿は入母屋造り。「長崎古今集覧名勝図絵」に描かれている本殿も同様である。²⁵（図11）

一方、「祭礼屏風」「民博屏風」では、本殿は本屏風同様に流造で描かれている。（図10）

諏訪神社開創から慶応年間にいたるまで、敷地の変更、老朽化による建替え、柿皮葺きから桧皮葺きへの変更、台風による被害の修繕、火災による再建など一〇回に及ぶ本殿の工事が行われた。

本屏風を含む各資料それぞれで本殿屋根の形が違うのが、それら

の工事によるとすれば、本殿は、寛政五年（一七九三）、文化八年（一八一二）の屋根の葺き替え、もしくは文政一〇年（一八二七）以降の柿皮葺きから桧皮葺きに変更した工事が関係すると考える。²⁶

本殿に続く祝詞殿、渡殿、拜殿、中門、回廊、能舞台、大門などの配列や形状をもとに各資料を比較すると本殿同様、本屏風、「祭礼屏風」「民博屏風」と「祭祀図」「名勝図絵」のふたつに区別できている。とくに本屏風と「祭礼屏風」では、諏訪神社の構造が極めて似ていることがわかる。

本屏風では、大門の左右に矢大臣、矢五郎と呼ばれ氏子に親しまれていた門神が描かれている。両神とも黒い衣装をまとうて鎮座しているが、「祭祀図」に描かれている両神は柿色と黒の衣装に描かれている。文化七年両神に修理が施されたという記録から、衣装の色がこの修理で変わったと考えたい。²⁷大門には紋付の町人と半身だけ僧体の者がみえる。神社境内に描かれている人物はこの二名。

大門から踊馬場まで七三段の長坂を下る。長坂は左右練塀が続く。享保七年高木作右衛門が寄進した一对の石灯笼は描かれていない。

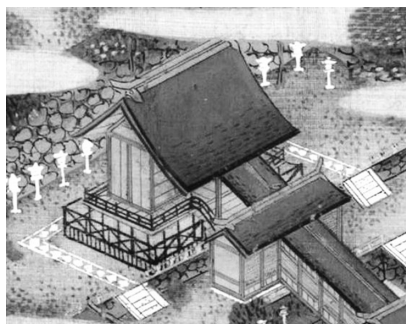


図10 流造の本殿（祭礼絵巻）

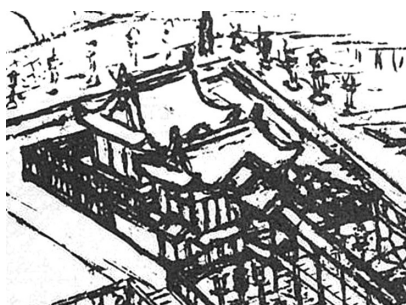


図11 入母屋造の本殿（名勝図絵）

い。向かって左には二本の松の巨木が拝殿の高さまでそびえたっている。享保二年改築された二の鳥居、寛永一四年（一六三七）惣町から寄進された一の鳥居がある。風頭山石で造られたこの鳥居のあたりには、紋付の町人が二人。南馬町の番所の中には、町の世話役が座り、その前に行列最後尾の地役人がみえる。²⁸

このように諏訪エリアは、本屏風の中では行列出発後の静寂が描かれている。沿道の北馬町の町屋には、青竹が立てられ、幕が張られ、大きく開け放たれているもの、描かれている人物は、勝山町の通りに面した家の三人。祭礼や関係する人物を描くというよりも建物や通りなどのリアルな描写がエリアの主題となっているように考える。

・中島川エリア

本屏風右隻四扇から六扇の下部に中島川と石橋二橋が描かれている。中島川エリアは、馬町通りを上辺、桜町通りを左辺。下辺と右辺を屏風の末端として描かれているが、ほとんどが雲に隠されており、石橋、お堂、広場などの情景と人々の姿がみえる。

原田博二氏によれば、川は屏風右から左に流れ、上流にある橋が桃溪橋。下流にある橋が大井手橋という。²⁹（図12）

上流の橋の下を流れる堂門川とは別に本流に合流しようとする銭屋川がある。合流地点では二股川という呼称もある中島川を描いたものである。そのため上流の橋は位置的に桃溪橋と特定ができる。

下流の橋は、橋と並行し水道橋が描かれていることから大井手橋であろう。この水道橋は長崎に張り巡らされた倉田水樋という上水道を描いたものであり、水道橋、露出した水樋が描かれている絵図は希少なものである。

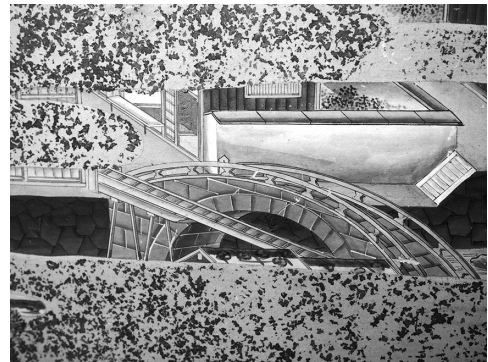


図12 大井手橋と水樋（本屏風部分）

倉田水樋は、海を埋め立てた長崎の中心部への飲料水や消防用水給水のため倉田次郎右衛門吉重が私財を投じ、寛文一三年（一六七三）完成させたもので、明治維新まで次郎右衛門の子孫が地役人として維持管理の役目を任されていた。本屏風が描かれた寛政年間には六代目倉田勘平次国憲が水樋支配役であった。³⁰

桃溪橋と大井手橋の中間、右岸にお堂がある。老人がひざまずいて拜んでいる様子は住民の崇敬の深さをあらわしているようだ。このお堂は、背後にみえる真言宗青光寺の不動堂³¹。天保八年（一八三七）大工日雇等の手間寄進で改築された。明治の廃仏毀釈で青光寺が廃寺になった後も不動堂だけは維持されている。³²

本屏風に描かれた中島川は、水量が豊富で水流も速い。水源から河口までわずか数キロメートルの急傾斜を一気に流れ下るため、大雨の被害が大きい。描かれている大井手橋は、寛政七年（一七九五）七月一九日の大雨で流出した。応急の仮橋もまた翌八年の大雨で押し流されたと記録されている。³³

諏訪神社エリアがほぼ無人なのに対して、中島川エリアには一名の町人が祭礼とはまったく関係ない風情で立ち話をしてるように描かれている。このエリアが住民のくつろぎの場として認識されていたことのあらわれであろう。

・代官所エリア

右隻一扇から三扇にかけて描かれているのは勝山町代官所から興善町あたりまでの代官所エリア。代官所、鉄砲方屋敷、町年寄居宅などの役所エリアである。

代官所は、祭礼行列やオランダ人の行進の図などの背景に描かれることがあるが、代官所内部にどのような建物があったか絵図で記録されたものは管見にして知らない。本屏風では、瓦屋根と板屋根の混在する平屋建てのように見える。(図13)

代官所は、末次平蔵の屋敷であったものを高木家が拝領し、代官所として使用していたため、高木家の私的空間も含まれていた。物見台とみられる二階建ての家の窓辺には、高木家の家族と思われる女性二人が離れた場所から左折する行列を見物している。

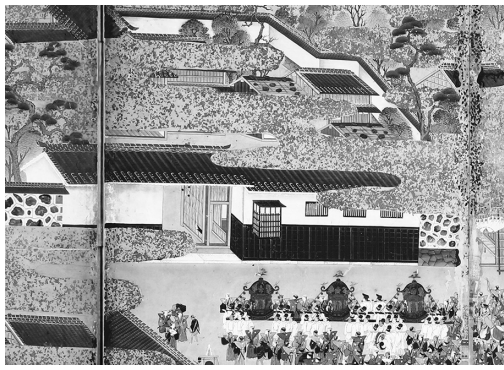


図13 代官所と三社の神輿(本屏風部分)

都市長崎の中心の通りは、西役所から立山役所までの道。代官所

前の勝山町から桜町、本興善町、

大村町の通りがそれに該当する。

右隻三扇で行列が左折している場所が豊後町の角。屏風では代官所前のようなが、実際は桜町など百メートルほど通りを省略して描かれている。同時に神輿行列の省略もみられる。³⁵

行列が中心の通りを行かず、脇道に進んでいるのは、寛政一一年最初の渡御に、豊後町四つ角でキリシタンの集団に待ち伏せされ石や瓦をもって妨害さ

れたのを避けるため、豊後町横町に左折し、新町、島原町筋を進んだことが恒例とされたことによる。³⁶

本興善町・大村町筋は、現在でも県庁と市役所を結び、多くの会社や支社が立ち並ぶオフィス街であるが、本屏風が描いた寛政の長崎でも同様の存在感があった。ところが、図らずも行列がそれて、新町・島原町筋を進んだため、本屏風では、後者の町屋が詳しく描かれているのに対して、前者は通りの筋さえはつきりしない。

つまり、長崎の町を描くという目標と祭礼を描く目標では、祭礼の方に比重が置かれているという本屏風の性質があるのであろう。

③左隻の検討

・町屋と遠景のエリア

本屏風左隻は六扇から三扇に向かって進む踊町の行列、二扇の西役所前棧敷、一扇の御旅所。さらに一扇下部には踊りを終え庭先回りへ向かう踊町が一連の流れとして描かれている。

その流れの上部には、本興善町・大村町筋と新町・島原町筋が並行して描かれている。さらには、左隻全体を通して上部に長崎を取り囲む山々が遠景として描かれている。(図14)

左隻の上部三分の二をしめる町屋と遠景エリアの中心は、本興善



図14 左隻各エリア

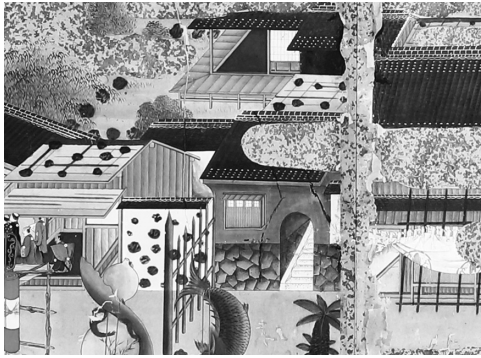


図 15 吉雄耕牛邸か（本屏風部分）

町・大村町筋。人物は一三人。振売りが二人、旅僧が一人の他は御旅所の方へ向かう人々。供から支えられて歩いている酔客がくんちの雰囲気を伝えている。大通りにしては、閑散としており、家屋に人がみえない。

この通りには、鐘楼、唐通事会所の他にも、町年寄高島作兵衛等上級地役人の邸宅が並んでいた。特に平戸町の阿蘭陀大通詞吉雄耕牛邸には全国から多くの学者が訪れ、屋敷の二階に拵えていた阿蘭陀座敷は「出島ヨリヨロシ」と言われるほど評判であった³⁸。

ちなみに、屏風が描かれた寛政二年からさかのぼること二年、天明八年（一七八八）吉雄邸を訪ねたのが奇才の西洋画家司馬江漢。

他の蘭学者のように吉雄家の生活や阿蘭陀船内部まで江漢を連れない江漢に対して、老年の耕牛は出島や阿蘭陀船内部まで江漢を連れていき、めったに人を入れない阿蘭陀座敷に泊まらせるなど接遇を尽くした事が『西遊旅譚』に記されている。その吉雄邸もこのエリアにあった³⁹。

三扇、西役所前の広場に隣接するように描かれている土蔵造りの家。白壁ではなく黒壁に塗られ、中央の階段で内部に続いている。奥には中庭、広縁のある座敷。二階建ての棟があることから富裕で身分の高いものの家であろう。

当時蘭学者として高名な吉雄邸をこのような形で屏風に描き込んだという見方は、飛躍しす

ぎだろうか。（図15）

二扇上部、雲の間に描かれているのは筑後町、金刀比羅山方面。中腹にみえる寺は本蓮寺と福濟寺であろうか。金刀比羅山の奥には、特徴的な山容から三山、岩屋山らしき山がある。岩屋山から左に連なるのが稲佐山。背景を雲でごまかさずに描くところからこの景観を描いた人物は長崎を知り尽くした人物であったと考えたい。

寺の下に描かれた人物は、旅人二人と従者一人、飛脚一人。この通りは浦上街道（時津街道）であろう。旅人は画面左側時津方面へ向かい、飛脚は右側の市中へ向かっている。司馬江漢が歩いたのもこの浦上街道であった。

・西役所出島エリア

一扇から三扇の下部。長崎奉行所西役所と江戸町通り、海を挟んで出島が描かれている。

本屏風だけでなく、「寛文屏風」と「祭祀図」でも、西役所はくんに関連して、重要な役目をつとめている。

長崎奉行所は、文禄元年（一五九二）から寛永九年（一六三二）まで本博多町に置かれた。火災のため糸割符会所と換地して外浦町へ移転し、敷地内に東西二つの屋敷を建て西役所、東役所と称した。その後、火災での類焼を恐れ、西役所が外浦町、東役所は岩原郷に移り立山役所と改称された⁴⁰。

「寛文屏風」では、大波止沖から俯瞰した西役所が描かれている。大波止から西役所の坂には、オランダ人や唐人たちの姿が描かれ、西役所の門前で商うオランダ人の姿もある。西役所の門は大きく開かれ、庭には青松と紅葉の植え込みもある。屋根は桧皮葺きか柿葺き。寛文長崎大火の教訓として、屋根に水を入れた大壺と梯子が備

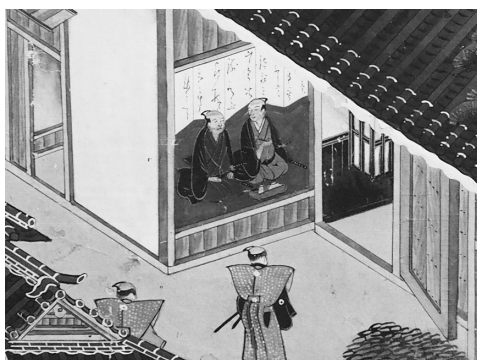


図16 西役所門（内部）

え付けられている。人物は見られない。

「祭祀図」での西役所は、お上りの神輿行列の最後尾が通過しようとする場面に描かれている。無人の御旅所が奥にみえる。長屋門はくぐり戸だけが開かれている。屋根は瓦葺き。奉行所内部も無人。文字通り祭りの後である。

本屏風の西役所は、出島方面から俯瞰して描かれている。興味深いのは、長屋門の入口に警備の侍が座っている姿、建物、塀の忍び返しなど、内側から見た西役所が描かれていることである。(図16) 門が開け放たれているのは奉納踊を見物した後に控えている神輿行列を両長崎奉行が迎えるためである。一般の町人が頻繁に訪れるような場所ではないため、西役所についてよく知る人物が屏風の製作に関わった可能性もみえる。⁴¹

本屏風第一扇下部に三色のオランダ国旗が翻っている。対岸の江戸町との間に水面がみえることから出島であることがわかる。(図17)

幕末から明治にかけて蝦夷地の探検家として活躍した松浦武四郎の著『西海雜誌』には、出島の旗竿について次のような記述がある。「庭中に大なる旗を建てたり、赤青白三色の縫合わせにして、長さ一丈二三尺に横一丈斗に見へたり、旗竿の長さ四丈余り伸縮自由の仕懸ケ甚奇妙也」⁴²

幕末の外交交渉に携わった箕作阮甫の日記には「門を入り左折し、行こと一、二町にして青白赤の蘭旗を植つ、其柱は船桅の如く長さ三〇丈(ママ)許、白漆を用て塗墾し、四方より数丈の綱を引きて地に到る、一方に別に索梯あり、斜に引て地に到る」とある。⁴³

旗竿のほかにイ蔵、口蔵、塀などが精密に描かれている。表門と石橋は画面剥離のために完全ではないが、高札の形状や位置、忍び返しなど十分な観察をもとに描いているようだ。

江戸町側は水中に木製の柱を立てた架造がみられる。対岸から見ないとよくわからない死角の部分であるが、これも詳しく描かれている。

江戸町の通りを行く行列は、御旅所での奉納踊を終え、庭先回りに向かう踊町。傘鉾の飾りに「古町」とある。

西役所出島エリアは、奉納踊の賑わいと神輿の渡御を待つ静寂が描かれているようである。

・祭りのエリア

神輿行列と西役所、御旅所の奉納踊が右隻と左隻を貫く本屏風の中心主題であろう。人物の分布、歩いて行く方向などで諏訪神社から御旅所へ見る者の視線を導いている。

右隻から続く神幸行列は、奉納踊を終えた古町を先頭に、御旅所で唐子獅子踊りを舞う上筑後町、西役所で大薩摩を披露している勝

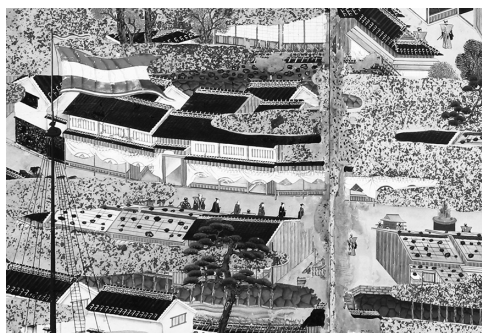


図17 出島と江戸町（本屏風部分）

山町、待機している江戸町、その後ろに続く興善町（本興善町か後興善町かは不明）の五つの踊町が描かれている。

寛永一一年にキリシタンの妨害によって新町・島原町方面へ曲げられた神幸行列は、外浦町から桜町本博多町の中心通りへ復帰する。曲がり角は西役所での踊りの待機場所になっている。

今日の祭礼では、西役所前に相当する踊り場所がないことから、御旅所と混同されがちであるが、二つの場所は階段でつながる別の場所であったことが本屏風に描かれている。

西役所で踊りを終えた踊町は階段を下り、御旅所へ向かうが、連続して演技をしているのではなく、階段下の五島町側や江戸町海岸通りに次の踊町が控えているのだろう⁴⁴。

「長崎歳時記」には、西役所での奉納踊について次のようにある。

一此日西屋敷の棧敷へは両府尹（※長崎奉行 筆者）ならびに部下の吏その外御勘定方御代官等なり、扱踊場の左右には床を置、部下の吏兩人宛うしろに道具を立ならへ警固をなす、遠見番唐人番町使散使の吏目等左右に並居る事諏方社の式の如し⁴⁵

西役所での奉納踊は、奉行所へ向かって演じられている。西役所の門には白い天幕が張られていることから、この下に両長崎奉行、代官等が踊りを見ているのであろう。

広場左右には棧敷が設置され、左右には床がしつらえられている。警備のために、遠見番、唐人番、町使、散使等武士身分の者が帯刀して座っている姿が描かれている。

一此日御旅所に八部下の吏出る事なく、御役所附きの吏目兩人床に

相詰、其外船番町使の吏目場所の左右を警固す

御旅所には奉行の家来ではなく、奉行所の役人が座り、警固の武士の姿もみえる。

御旅所に向かって右の棧敷の二階には、オランダ人五人が椅子に座り、見物している。オランダ人の見物は定式ではなくカピタンの考え次第で、出島の前で披露を頼むこともあった。⁴⁶（図18）

五人のオランダ人の後ろには、四人の従者がみえる。また、日本人は通詞であろうか。一人だけ、クレイパイプを吸っているオランダ人がいる。人物特定については今後の課題としてとどめておきたい。

他の屏風で中心的な画題の一つとして描かれている外国人が、本屏風では、観客席の一部を占めている以上の描き方がされていない。唐人にいたっては、かろうじて一〇人ほどの後頭部が確認できるだけである。

祭りエリアでは長崎奉行やオランダ人たち観客が重点的に描かれているのではなく、踊町の奉納踊や待機の様子、行列など神幸行列の流れを描いているようにみえる。

五 寛政二年の長崎

屏風左隻中央。薩摩踊りの指物「寛政二」の文字は、本屏風の性格を探る大きな手が



図18 御旅所棧敷のオランダ人

かりである。指物については、既に述べた通り、流行や世相を反映させた新作と考えられる。その場合の年号は踊りの披露がまさに寛政二年であったことをあらわしている。

また、作者の考えで加筆したのであれば、作者が描きたいものが寛政二年の長崎ということなのであろう。

長崎にとって、寛政二年というのはどのような年であったのか、また、寛政二年の長崎はどのような都市であったのか。

寛政二年。將軍は徳川家斉。長崎奉行は水野若狭守忠通、永井筑前守直廉。長崎代官は高木作右衛門忠任。オランダ商館長はヘンドリック・カスベル・ロンベルフであった。

近來諸山出銅不進二因テ半減商売被仰出自今年々壹艘宛渡來可致尤銅之儀ハ六十萬斤宛可被相渡旨被命之且半減商売ニ付テハ向後江府拜礼之事モ五箇年ニ壹度出府可致献上物并諸御進物等モ半減之積リニ可心得旨九月六日甲必丹被諭之

但參府休年之節ノ献上物并諸御進物共半減ニテ御役所附觸頭御役所附大小通詞等附添出府可致旨被命之「長崎志続編卷七」⁴⁷

寛政二年。国内銅山の出銅が不振となったため、貿易量を半減し、かつカピタンの江戸参府や將軍への進物なども半減するといういわゆる貿易半減例が長崎に伝えられた。

九月六日ということは、本屏風で描かれているくんちのお下り九月七日の前日にカピタンに伝えられたということである。

貿易量を半減し、かつカピタンの江戸参府を五年に一回、進物を半減となれば、直接的に長崎の町や住民生活に影響が及ぶのは明らかであった。

貿易半減の背景には、老中松平定信の政策があった。定信は、「長崎之地ことに乱れて、已にちかきころ戸田某といふ奉行は彼地にて即死したほどなりき」と書き残すほど長崎と長崎の住民たちに不信をもっていた。⁴⁸

「とにかくに長崎は日本の病の一つにて御座候」⁴⁹という言葉が定信の長崎への見方をあらわしている

都市長崎と住民は、全面的に唐蘭貿易に依存した成り立ちで、貿易で蓄えた金銀も唐蘭船が入港しないとたちまち使い果たし、借金を抱えるような状態であることを指摘している。

輸出品は銀や銅を除けば貧相で、銅の産出が急減した寛政期にはすでに、町の存続が危ぶまれ、住民たちに紡織、作陶、紙すきなどの生業を教え、さらに困窮しているものは新田を開発して移住させるなどの対策を立てなければならぬと定信は考えたのであった。⁵⁰

寛政二年九月二日。水野忠通は勘定奉行格の長崎奉行として着任した。一年ぶり二度目の在勤だった。水野は長崎に質素儉約、貿易半減の指示をもって赴任し、諏訪祭礼終了後各所に伝達した。⁵¹

本屏風の描く寛政二年九月七日は、貿易半減政策がまさに長崎を直撃しようとする前夜であった。離任する永井直廉と着任した水野忠通が西役所前棧敷に揃って着座し、奉納踊りを見物している瞬間をとらえている。しかし、その姿は屏風の上には描かれておらず、西役所門前に張られた天幕だけが、二人の存在を示している。⁵²

水野忠通赴任に先駆けて、長崎廻銅、会所銀繰り不調のため、勘定組頭松山惣右衛門直義と支配勘定平田恵十郎が、五か年の期限内で長崎勤務を命じられ、九月二日水野とともに着任した。⁵³

松山、平田両名は、本屏風西役所棧敷奥の上座に座っている二名の武士ではないかと考える。

本屏風で人物名がはっきりしているのは、神輿行列で輿上に座っている大宮司青木若狭守永勇ただ一人。前述の通り、カピタンや唐人、地役人等特定できるような描き方ではない。

本屏風に描かれている可能性がある人物としては、阿蘭陀カピタンロンベルフ、漂流日本人を浙江省乍浦から移送した唐船船主程赤城、陳晴山。祭礼後、樟脳銀の取扱いについて不備があったということ⁵⁴で罰せられた阿蘭陀通詞目付吉雄幸作（耕牛）、同大通詞榎林重兵衛、本木仁大夫（良永）も行列に供奉していたのであろうか。

本屏風に書かれた「寛政二」は、祭礼が行われた年、あるいは屏風の作者が描きかけた年の手掛かりではなからうか。寛政二年は貿易半減政策や綱紀肅正など、長崎の町全体に関わる改革が行われた年であった。諏訪祭礼は、新旧奉行の交代時にあたる。新在勤奉行水野忠通は、祭礼後改革を開始する。このような社会情勢が背景にあって、本屏風に描かれた祭礼はまさに改革前夜の賑やかな町の様子を伝えるものであろう。

六 結び

「長崎諏訪祭礼図屏風」は、神幸行列と付祭り両方を描いた祭礼屏風である。屏風の作成年代は、「寛政二」の表記、諏訪神社の玉垣や長坂の塀、神輿の形式などを考慮し、寛政期と考えたい。

寛政二年という年は、長崎にとって貿易半減政策が開始された年として記録されている。すべての経済活動を唐蘭貿易に依存して成立していた都市長崎と住民にとって、貿易縮小は経済的なダメージに直結した。やがて、長崎繁栄の象徴ともいべき諏訪神社の祭礼は、都市の実態や住民の生活レベルとかけ離れた特別なものに変わっていった。

本屏風が描いたものは、賑やかな祭礼だけでなく、歴史的に変化してゆく都市繁栄の虚像と実像を反映したものであったのではなからうか。

（長崎市長崎学研究所主幹）



↑「長崎諏訪神社祭礼図屏風」右隻



↑「長崎諏訪神社祭礼図屏風」左隻

¹ 「思文閣古書資料目録 第二百五十号記念特別号」(一一八～一二一頁)に掲載され、平成二九年度に長崎市が購入した。名称については、図録掲載時の「長崎諏訪神社祭礼図屏風」を引き続き使用している。

² ヤマ、タニの部分全体的に痛みが見られ、銀泥と金銀箔のちらしで補修している。主な欠損の部分としては、右隻と左隻によって神輿行列の先頭が分断され、不明確になっていることと出島と江戸町を結ぶ石橋の大部分が欠落している。

³ 渡御の道筋は詳細に描かれる一方、渡御に関わらない本興善町、大村町筋は簡単に描かれ雲で隠されている。中島川上流の石橋は描かれているが、下流はすべて省略されているなど、渡御が中心の構図である。

⁴ 鷹巢純「六道絵にみる絵と語り」、久野俊彦「絵を読む視点―間引き図を読む―」、五月女晴恵「遊びの絵巻鳥獣戯画―甲巻の主題と政策目的について―」、林雅彦・小池淳一対談「絵説き研究の地平」(いずれも『歴博』一二七、二〇〇四年、国立歴史民俗博物館)を参考に絵解きを試みた。また、姫野順一氏に絵画資料は作者の意図を読み取るために文字資料や実物資料とすり合わせる事が絵説きとして重要であるとの御教示を受けた。

⁵ 本馬貞夫「貿易都市長崎の祭り『長崎くんち』」(『鳴滝紀要一六』九～二二頁、二〇〇六年、シーボルト記念館)では、長崎くんちを描いた絵画資料として、「諏訪神社祭礼図屏風」(富貴楼蔵)「長崎諏訪祭礼図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)「諏訪祭礼図絵巻」(長崎歴史文化博物館蔵)「諏訪神事御供道行之図屏風」(長崎歴史文化

博物館蔵)「長崎名勝図絵」を取り上げている。内容は、各資料の概観と補足説明。この資料を使いながら、長崎くんちの紹介を試みている。

⁶ 久留島浩、原田博二、河野謙「秘蔵 長崎くんち絵巻崎陽諏訪明神祭礼図」二〇〇六年、長崎文献社

⁷ 「寛文長崎図屏風」について最初の論考は、林源吉「長崎屏風に就て」『長崎談叢』第一五号、一九三四年。当時個人蔵であったものが戦後長崎市に譲渡され、長崎歴史文化博物館蔵となった。当時から、祭礼よりも都市を描いたものという見方がされていた。林氏は、寛文長崎大火から復興した街並みを描いた近世長崎の絵画資料として価値を認めている。

⁸ 前掲注6、七～八頁

⁹ 勝山町の薩摩踊は「崎陽諏訪明神祭礼図」(大阪府立中之島図書館蔵)と「諏訪神社神事祭礼絵巻」(長崎歴史文化博物館蔵)「諏訪神事御供道行之図」(長崎歴史文化博物館蔵)いずれにも構図の中心に位置している。今日のくんちにおける龍踊のように、定番として位置づけられたとみることができる。

¹⁰ 久田松和則「地方藩政における伊勢御師の役割―肥前大村藩・宮後三頭大夫の場合―」(『明治聖徳記念学会紀要明治聖徳』復刊十八号、三五頁、一九九六年)。橋村肥前大夫と長崎町人の関係については久田松氏の著書『伊勢御師と旦那 伊勢信仰の開拓者たち』(二〇一四年、弘文堂)に詳しい。

¹¹ 『長崎市史』地誌編神社教会部上巻、一二三頁、一九二九年、長崎市役所

¹² 青木永茂史好編輯『鎮西大社明鑑』古賀十二郎写、古賀十一

六八頁、長崎歴史文化博物館蔵

¹³ 前掲注11、九九頁

¹⁴ 前掲注11、一二九頁

¹⁵ 前掲注11、一二七頁

¹⁶ 前掲注11、九二頁

¹⁷ 前掲注11、六七〜六八頁

¹⁸ 前掲注11、九二頁

¹⁹ 前掲注11、二二五〜二七九頁。古賀十二郎は青木永茂史好編輯『鎮西大社明鑑』を参考に長崎市史を執筆している。

²⁰ 三島神社に神輿があることを明らかにしたのは、二〇〇八年長崎歴史文化博物館「くんち三七二年展」に出品にあたって、調査にあたった原田博二氏である。また、二〇一七年にも長崎市長崎学研究所の入江清佳学芸員が調査研究として三島神社に赴き、調査を実施している。現在は長崎市所蔵

²¹ 神輿各部の名称については、宮本卯之助『神輿大全』（二〇一一年誠文堂新光社）を参考とされたい。

²² 前掲注6、二二七頁。河野謙氏の労である。

²³ 「諏訪社事記」香月薫平編、古賀十二郎筆写、長崎歴史文化博物館蔵、古賀十一〜六七

²⁴ 「第一大区 神社明細調帳」長崎県、長崎歴史文化博物館蔵、十一〜九二

²⁵ 越中哲也注解『長崎古今集覧名勝図絵』長崎文献社、一九七五年、三四〇〜三五〇頁。越中氏は石崎融思が諏訪神社境内図を描いたとしている。文政から天保にかけて描かれたものと思われる。

²⁶ 前掲注11、六五〜一六二頁

²⁷ 前掲注11、前掲注23

²⁸ 南馬町番所は「民博屏風」「祭祀図」にも描かれている。長崎歴史文化博物館蔵「惣町絵図」では、番所は北馬町にある。もともと馬町という一つの町であったものが、南北に分けられたために生じた。

²⁹ 「楽37」イズワークス、二〇一七年、九三頁。また、本屏風公開にあたって開催された長崎学ネットワーク公開学習会で、原田博二氏がおこなった講演「長崎諏訪神社祭祀図屏風の史料の意義について」での講演記録による。

³⁰ 長崎市水道百年史編纂委員会『長崎水道百年史』一九九二年、長崎市水道局、三〇〜四三頁

³¹ 森永種夫校訂『続長崎実録大成』一九七四年、長崎文献社、一三七頁

³² 『長崎市史』地誌編仏寺編下巻、七七〇〜七七二頁、八五〇〜八五一頁、一九二三年、長崎市役所

³³ 前掲注31、四〇一頁

³⁴ 「蘭人コープス一行立山役所訪問図」長崎歴史文化博物館蔵、県図ス三二など。

³⁵ 本屏風の神輿行列は、「祭祀図」などに比べて神馬、宝珠纏、楽太鼓、市中郷中老若男女惣御供、五箇所宿老、会所役人、通詞などの省略。また、旗や鉦の数を少なくするなどの省略がみえる。

³⁶ 古賀十二郎編「諏訪社雑綴」長崎歴史文化博物館蔵、古賀文庫一一〜一六頁

³⁷ 長崎県庁は二〇一七年に江戸町から尾上町へ移転。長崎市役所も魚の町へ移転予定。

³⁸ 芳賀徹、太田理恵子校中『司馬江漢西遊日記』二〇一〇年、平凡社、二四四頁

³⁹ 前掲注38、一〇四頁

⁴⁰ 丹羽漢吉・森永種夫校訂『長崎実録大成正編』長崎文献社、一九七三年、二五〇二七頁

⁴¹ 前掲注29。また原田博二氏の御教示による。

⁴² 沼田次郎「出島見聞記(下)―江戸時代長崎紀行からの抄出―」(『長崎談叢』第七八輯、一九九二年、一五頁)。「西海雜誌」の出典は内閣文庫「文鳳堂雜纂」第二三卷としている。

⁴³ 前掲注42、二六頁

⁴⁴ 原田博二氏の御教示。富貴楼蔵「諏訪神社祭礼図屏風」左隻には御旅所左右の出入口に控えている踊町が描かれている。踊りが終わった町は階段を上り、庭先回りへ向かっている。本屏風では御旅所が俯瞰されて描かれているので、出入口はみえない。

⁴⁵ 「長崎歳時記」『長崎県史』資料編4、長崎県、一九六五年、九〇二頁

⁴⁶ 前掲注45に以下のように記述されている。「又同所に阿蘭陀人出る事あり、是は其年の在留かびたんのこころ次第なり、よつて年々定式ならず」

⁴⁷ 「長崎志続編卷七」(内閣文庫八八六五)

⁴⁸ 松平定信、松平定光校訂『宇下人言』一九六九年、岩波文庫、一〇一頁

⁴⁹ 辻善之助『田沼時代』岩波書店、一九八六年、二二八頁

⁵⁰ 前掲注48、一〇一―一〇三頁

⁵¹ 木村直樹『長崎奉行の歴史』二〇一六年、一〇八頁。前掲注48、

49については、木村直樹氏から御教示を受けた。

⁵² 「長崎御奉行御名并御在勤之次第」長崎歴史文化博物館蔵(福田一四―一〇〇)

⁵³ 「長崎御奉行附」長崎歴史文化博物館蔵(福田一四―一〇一)

⁵⁴ 森永種夫校注「犯科帳第四卷」犯科帳刊行会、一九六九年、二八六頁